

# 子どもの遊びを支える保育者の養成

— 自由遊びの援助過程において学生が困難を感じる場面とは —

高橋 真由美

## Abstract

This study was aimed at clarifying to various difficulties that may arise for student-teachers at kindergartens with regard to voluntary play. Analysis was performed on reports of problems received from student-teachers at the conclusion of their training. A total of 93 incidents were extracted from reports of problems experienced during free-play. Attention was paid to both the type of play and the factors leading to the problems described. Results showed that there was no relationship between the type of play and the occurrence of difficulties, with difficult situations tending arise regardless of type of play. In addition, the factors related to the occurrence of difficulties included “monopolization by the child” and “repetition of simple play”, and it was found that there were some differences in these factors according to the type of play.

## 1. 研究目的

幼児にとって、自発的活動としての遊びの充実  
は、心身の成長の上で非常に大切な役割を果たす。  
幼稚園教育要領の第 1 章総則第 1 幼稚園教育の基  
本にも、「幼児の自発的な活動としての遊びは、心  
身の調和のとれた発達の基礎を培う重要な学習で  
あることを考慮して、遊びを通しての指導を中心  
として第 2 章に示すねらいが総合的に達成される  
ようにすること」<sup>1)</sup>とある。幼児期の生活の中  
でも、「遊び」そしてその遊びでも「自発的な活動  
としての遊び」は、幼児に非常に大切なもので  
あることが、この記述をみても明らかである。

では、自発的な活動としての遊びが充実するた  
めには、何が必要なのだろうか。幼稚園教育要領  
では、幼児期の教育を「環境を通して行う教育」  
としている<sup>2)</sup>。環境を通しておこなう教育とは、  
「幼児が、教師と共に生活する中で、ものや人な  
どの様々な環境と出会い、それらとのふさわしい  
かわり方を身に付けていくこと、すなわち、教師  
の支えを得ながら文化を獲得し、自己の可能性を  
開いていくことを大切に教育」<sup>3)</sup>である。その  
ため、幼児をとりまく環境がどのようなものであ

るのが重要となる。環境と一口に言っても、遊  
具や用具などだけを指すものではない。上記のよ  
うに、「教師の支え」が非常に大切な要素となる。  
環境の整備は教師にとって非常に大切な仕事のひ  
とつであるが、環境だけを整え、あとは子ども達  
の自由に任せるのではない。幼稚園教育要領でも、  
「環境とのかかわりを深め、幼児の学びを可能に  
するものが、教師の幼児とのかかわりである」<sup>4)</sup>、「教  
師自身も環境の一部である。教師の動きや態度は  
幼児の安心感の源であり、幼児の視線は、教師の  
意図する、しないにかかわらず、教師の姿に注が  
れていることが少なくない」<sup>5)</sup>、「教師がモデルと  
して物的環境へのかかわりを示すことで、充実し  
た環境とのかかわりが生まれてくる」<sup>6)</sup>とされて  
いるように、教師が環境に、そして子どもにいか  
に接していくのかということが、「環境を通して行  
う教育」では、非常に大切な鍵となるのである。

以上のことを考えると、保育者となるための大  
切な力のひとつは、「子どもの自発的な遊びにうま  
くかわること」であると言えることができる。保  
育者の養成段階でも、もちろんその力をつけるこ  
とは必要であろう。

しかしながら社会の変化などにより、保育者を

志す学生達には、小さい子どもと接する経験や自身の遊び経験の乏さから、子どもの遊びにかかわる際に戸惑いが見られる。本学で2年次に行う系列園での実習においても、当初は子どもの遊びにどのようにかかわって良いのかわからず、何もできずにぼんやりしている様子や、逆に、子どもにあちこち連れまわされ、子どもに「遊んでもらっている」状況も見られる。しかしこれは、その学生達に保育者としての資質がないわけではない。小さい子どもと接する機会や遊びの経験の少なさから、小さい子ども達にとって、どのような遊びが面白いのか、またどのように遊びにかかわると遊びが面白くなっていくのかが、わからないということが大きな要因ではないだろうか。

これらの状況を踏まえ、幼児の遊びに適切な援助ができる保育者になるために養成校としてどのような学びの機会を与えるべきだろうか。それを検討するためには、学生が遊びの際、かかわりのどこに困難を感じるのかを明らかにする必要がある。

そこで本研究では、保育者を志す学生が、自由遊びの時間に困難を感じるのはどのような場面か、またどのような要因により困難を感じるのかを明らかにすることを目的として行う。

## 2. 研究方法

自由遊びの援助過程において、学生が困難を感じる場面の内容を明らかにするために、本研究では、実習後に学生に課題として提示した「幼稚園教育実習の自由遊び場面における子どもとのかかわりについて」のレポート記述内容の分析を行った。研究対象は、2008年度に幼稚園教育実習を行った3年次生82名のうち、レポート課題を提出した76名である。レポート課題は、「幼稚園実習における自由遊びの時間の子どものかかわりについて、①うまくかかわった場面、②うまくかわれなかった場面、③困難を感じた場面」を問うものであった。課題は、幼稚園実習Ⅱの事後指導である2008年11月18日に、少人数のグループに分かれ、レポート課題内容①～③の内容にはどのようなものがあつたのか各グループで話し合った後、各自40分程度で記入してもらった。

本研究では、レポート課題のうち、「③困難を感じた場面」の記述から抽出した、遊びを支える場

面93事例において、展開されている遊びの種類と困難な状況をもたらす要因となるものにはどのようなものがあるのかということを検証した。

## 3. 結果

### 3-1 事例にみられた遊びの種類

最初に、「③困難を感じた場面」の記述で抽出された93事例にみられた遊びを、その遊び内容から、以下の6つの種類に分類した。

- 1、ルールのある遊び
- 2、物を介した遊び
- 3、ごっこ遊び
- 4、探す・採る・観察等
- 5、運動遊び
- 6、遊びの内容は特定できず

「ルールのある遊び」とは、「鬼ごっこ」、「かくれんぼ」、「リレー」、「野球やサッカー」などのように、何かしらのルールが存在し、そのルールに従って遊びが進んでいくような種類のものである。「物を介した遊び」は、「砂場」、「折り紙」、「お絵かき」、「積み木」、「絵本」、「あやとり」など、何か物を使ってする遊びである。「ごっこ遊び」は、「ままごと」、「戦いごっこ」など、何かのイメージをもとにして、お互いがそのイメージに沿いながら展開する遊びである。「探す・採る・観察等」は、「虫採り」、「どんぐり拾い」など、自然物をさがしたり、採取したりする遊びである。「運動遊び」とは、「縄跳び」、「竹馬」、「トランポリン」、「綱のぼり」など、身体機能を使う遊びである。「遊びの内容は特定できず」は、記述の内容からは、遊びの内容が特定できないものを指す。

遊びの分類の仕方については、「この特徴をもつので○遊び」というように、はっきりと分けることは難しい。例えば、「ごっこ遊び」は、ルールを含む遊びでもあり、物を介して行う遊びでもある。また「運動遊び」は、そのほとんどが「物を介した」ものでもある。しかしながら、本研究では、遊び内容の主な特徴から以上の6つに遊びの種類を分類することにした。

表1は、93事例において、6つの種類の遊びがそれぞれどのくらい見られたのかを示したものである。

表1 困難を感じた場面に見られた遊びの種類とその頻度

遊びの種類	頻度	割合(%)
ルールのある遊び	17	18.3
物を介した遊び	13	14.0
ごっこ遊び	12	12.9
探す・採る・観察等	4	4.3
運動遊び	7	7.5
遊びの内容は特定できず	40	43.0
合計	93	100

93事例のうち、一番多かったのは「遊びの内容は特定できず」(43.0%)であった。これらの事例は、どのような遊びをしているのかは特定できず、困難な状況のみが書かれているものであった。次に多かったのは、「ルールのある遊び」(18.3%)であり、次には「物を介した遊び」(14.0%)、「ごっこ遊び」(12.9%)と続いた。「探す・採る・観察等」(4.3%)、「運動遊び」(7.5%)はいずれも1割以下で、本研究で抽出した事例の中では頻度が低かった。

### 3-2 困難な状況をもたらす要因

次に93事例において、その場面が困難場面となった要因は何かということを書き記述から検証した。93事例にみられる困難な状況をもたらす要因は、以下A～Gの7つのカテゴリーに分類することができた。

- A、子どもに独り占めにされる
- B、単純な遊びの繰り返し
- C、言葉かけに困る
- D、ルール違反をする
- E、体調が悪いなど自分の状態
- F、遊びの内容が理解できない
- G、遊び環境の悪さ

「A子どもに独り占めにされる」の記述では、「数字に興味がある子に“数字書いて”と頼まれ、長い時間書いていた」、「コーナー製作場面で、他の子とかかわりたいのに、特定の子が何度も何度も作り、それを見て欲しいと言われた」、「他の子と遊ぶことをさりげなく促そうとしても、“先生とふたりがいい”と言われ、なかなかその場を離れることができなかった」、「何度も何度も“しゅりけ

ん作って”とお願いされ、ひざの上ののり、なかなか離れてくれなかった」など、他の子とのかかわりや、他の遊びへも目を向けたいのに、ひとりの子どもに長い間独占され、それが叶わないような様子が見てとれる。

「B単純な遊びの繰り返し」の記述では、「鬼ごっこをしていた時、ずっと鬼役をしなくてはならなかった」、「戦いごっこで悪者役を何度も何度も繰り返しやらなくてはならなかった」、「ブロックで武器を作り攻撃してくる相手に対し、最初はいいがリアクションが一定になってしまう」、「大縄をひたすら回し続けなくてはならず、終わりが見えない遊びに感じた」、「トランポリンを跳ぶ数をずっと数えなくてはならなかった」など、同じことを繰り返すことに対して、少々飽き飽きしている様子や、どのように振る舞えばよいかわからなくて戸惑う様子がみられた。

「C言葉かけに困る」の記述では、「女の子のお友達の取り合いが陰湿だった」、「乱暴な言葉を言ったり、叩いたりしてくる」、「もめごとで遭遇した時お互いに相手が悪いと言い合い、状況もわからなかった」、「できることを見てと言われた時の言葉かけがマンネリ化してしまう」、「誰かと遊んでいる時に、他の子に遊びに誘われ、何と云って良いか迷った」など、もめごとが起こった時や、子どもに感情をぶつけられた時にどのように対処すれば良いのか、戸惑いを感じているようであった。

「Dルール違反をする」の記述では、「かくれんぼで使ってはいけない場所に隠れる」、「わざとルール違反をする」、「鬼ごっこですぐにバリアを使うので、ルールを設けるとつかまった時に泣いてしまう」、「異年齢でサッカーをしていた時にルールが統一されず、遊びがうまく進まなかった」、「遊びのルールをどんどん変えて自己中心的に遊びを進めとする子といる時にはその子が遊びを展開するたびにめめた」など、子どもの自己中心的な振る舞いに翻弄され、なかなか遊びが進んでいかなかったり、もめごとがおこったりする様子が伺われる。

「E体調が悪いなど自分の状態」の記述では、「暑い日の外遊び」、「体調が悪い日の鬼ごっこ」、「野球が流行っていたが、運動が苦手なのでうまく相手ができない」、「作ってと言われたものをうまくつくることができない」、「悪いと思いつつも自分

の気持ちがない」など、自分の体調や得手不得手、その時の気分などによって、遊びにかかわるのが少し負担になっているような様子が見られる。

「F遊びの内容が理解できない」の記述では、「アンパンマンごっこをしていた時、ルールは子どもでつくっているが、それがよく分からなく、何かしようとするときそれはダメばかりである」、「子ども達は楽しそうな様子だが、展開がなく、何をしようとしているのかわからない」、「アニメごっこはその世界観がわからないので、かかわるのが難しい」など、子ども達が何を意図して遊ぼうとしているのかが読み取れず、苦労している様子が伺われる。

「G遊び環境の悪さ」の記述では、「隠れるスペースがほとんどない狭い場でかくれんぼをしなくてはならなかった」、「ダンボールで車や電車づくりをしていたが、部屋が狭くてうまく遊べなかった」など、その遊びに必要とされる環境が整っていない場所で遊ばなくてはならない場面であることが見てとれる。

以上のように、困難を感じる場面において、その困難をもたらす要因には7つのものがあることがわかった。

表2は、それぞれの要因が93事例の中でどのくらいの割合で見られたかを示したものである。

一番多く見られた要因は、「子どもに独り占めされる」(30.1%)、次に多く見られたのは、「単純な遊びの繰り返し」(23.7%)であった。以下、「言葉かけに困る」(16.1%)、「ルール違反をする」、「体調が悪いなど自分の状態」(共に9.7%)、「遊びの内容が理解できない」(7.5%)、「遊び環境の悪さ」(3.2%)と続いた。

表2 困難な状況をもたらす要因

困難をもたらした要因	頻度	割合(%)
A 子どもに独り占めにされる	28	30.1
B 単純な遊びの繰り返し	22	23.7
C 言葉かけに困る	15	16.1
D ルール違反をする	9	9.7
E 体調が悪いなど自分の状態	9	9.7
F 遊びの内容が理解できない	7	7.5
G 遊び環境の悪さ	3	3.2
合計	93	100

### 3-3 事例にみられた遊びの種類と困難な状況をもたらす要因の関係性

ここでは、遊びの種類別に、困難な状況をもたらす要因が違うのかどうかを検証する。

表3は、遊びの種類別に困難な状況をもたらす要因の割合を示したものである。

「ルールのある遊び」では、困難をもたらす要因として一番多いのは、「Dルール違反をする」(47.1%)、次いで、「E体調が悪いなど自分の状態」(23.5%)、「B単純な遊びの繰り返し」(17.6%)と続く。

「物を介した遊び」では、「A子どもに独り占めにされる」(61.5%)、「B単純な遊びの繰り返し」(23.1%)が多かった。

「ごっこ遊び」では、「B単純な遊びの繰り返し」(58.3%)と「F遊びの内容が理解できない」(41.7%)のみが、困難をもたらす要因となっていた。

「探す・採る・観察等」では、「A子どもに独り占めされる」、「C言葉かけに困る」、「E体調が悪いなど自分の状態」、「G遊び環境の悪さ」が同じ割合(25.0%)であった。

「運動遊び」では、「B単純な遊びの繰り返し」

表3 遊びの種類別困難な状況をもたらす要因

遊びの種類	困難をもたらした要因の割合(%)							合計
	A	B	C	D	E	F	G	
ルールのある遊び	0.0	17.6	0.0	47.1	23.5	5.9	5.9	100
ものを介した遊び	61.5	23.1	0.0	0.0	7.7	0.0	7.7	100
ごっこ遊び	0.0	58.3	0.0	0.0	0.0	41.7	0.0	100
探す・採る・観察等	25.0	0.0	25.0	0.0	25.0	0.0	25.0	100
運動遊び	0.0	71.4	14.3	0.0	14.3	0.0	0.0	100
遊びの内容は特定できず	47.5	10.0	32.5	2.5	5.0	2.5	0.0	100

(71.4%)が最も多く、次いで「C言葉かけに困る」、「E体調が悪いなど自分の状態」が同じ割合(14.3%)であった。

遊びの内容を特定できないもの」に関しては、「A子どもに独り占めにされる」(47.5%)が最も多く、次いで「C言葉かけに困る」(32.5%)、「B単純な遊びの繰り返し」(10.0%)と続いた。

以上のように、困難をもたらす要因は、遊びの種類によってその頻度に若干差があるということがわかった。その違いに着目すると、遊びの内容の特質に左右されて頻度が高くなるものもあった。例えば、「ルールのある遊び」では、「ルール違反をする」がそれにあたる。また、「ごっこ遊び」は、子どものイメージの世界に寄り添って遊ばなくてはならない遊びのため、「遊びの内容が理解できない」という要因の頻度が高いこともそれに当たる。さらに、困難をもたらす要因として一番多かった「子どもに独り占めにされる」が、「物を介した遊び」に多かったことも、ひとつの特徴として捉えることができる。

#### 4. 考察

自由遊びの援助過程において、学生が困難を感じる場面はどのような場面であるかということ、**「遊びの種類」と「困難をもたらす要因」**に着目して検証してきた。遊びの種類は6種類に分類することができたが、それぞれの頻度を比較すると、「ルールのある遊び」、「物を介した遊び」、「ごっこ遊び」が多かったものの、どれかひとつが突出しているわけではなかった。さらに、遊びの内容を特定できない記述が43.0%であったことも合わせて考えると、困難をもたらす場面に、遊びの種類はさほど関係していないと言うことができる。すなわち、「学生は〇〇遊びでは困難に遭遇することが多い」というように限定して捉えることができないということである。

また困難をもたらす要因は、「子どもに独り占めにされる」「単純な遊びの繰り返し」、「言葉かけに困る」が、頻度の高い上位3要因であった。これらの要因は、「実習生」という立場であるが故の要因であると捉えることもできる。「独り占めにされる」などは、その典型であろう。

しかしながら、これらの状況を「実習生だから仕方がない」と片付けてしまうわけにはいかない。

これらの要因を少しでも取り除き、学生が子どもの遊びをうまく支えることができるようになるためには、何が必要なのだろうか。

困難要因に挙げられた「独り占めにされる」、「単純な遊びの繰り返し」は、表面的な状況だけを見ると、確かにつまらなく、単調な場面である。しかし、その場面で「子どもの心の奥底に何かあるのか」、「子どもの成長発達にとって、この今の状況はどのような意味をもつのだろうか」という視点を持って捉えようとする、新しい発見があるかもしれない。自分のことを独り占めしたい子どもの気持ちはどこからきて、どういったものであるのかを考えて対応してみる。すると、子どもの奥底にあるものが見えてくる。その子どもを真に理解することに近づくのである。そうすることで、独り占めがいやだと思っただけでなく違った方向性を持って、かかわる術が見つかるのではないだろうか。本研究では対象にはしなかったが、学生の記述で「うまく遊びにかかわることができた事例」の中に、「いつも自分を独り占めしてくる子どもがいて困ったが、それには何か理由があるのだらうと思ひ、ある日、その子と思いきり遊ぶ決心をして接したところ、程なくして、その子が自分から友達の輪の中に入っていった。気持ちを受け止めて満足させることもとても大切であることがわかった」という記述があった。この例は、まさに「独り占めされている」状態を、困った状態として捉えるだけでなく、その状況に潜んでいる「意味」を見つめようとした結果、良い方向に援助することができた場面である。

また、「単純な遊びの繰り返し」にも同じようなことが言える。子どもは繰り返しが好きである。何度も何度も同じことをして、そのひとつひとつの中から様々なことを学んでいくのである。一見、単純な繰り返しに見える遊びでも、子ども達には大切な場面かもしれない。「この繰り返しに何の意味があるのだろうか」「この繰り返しはやがてどこにつながっていくのだろうか」などの見通しが少しでもつけば、「単純な遊びの繰り返し」と思っていた遊びが、とても大切な場面に変わるかもしれない。

このように、遊びの表面ではなく、内面を注意深く見取っていくことが、遊びにかかわる際には必要であり、それを行うことで困難な要因と思われたことが、実はとても大切な場面に代わる可能

性があることを、学生達に伝える必要性を感じた。

また本研究では、遊びの特質の違いによって、困難をもたらす要因にも若干の違いがあることもわかった。ルールのある遊びでは、子ども達にどのようにルールを伝えるのか、ルールの変更を周知するためにはどのような方法があるかなどの方法論や、ごっこ遊びの世界観を理解するために、ごっこ遊びの構造やごっこ遊びの年齢的な発達などを知らせることも必要であるように感じた。

以上のように、困難な状況をもたらす要因を分析することで、学生へ何を伝えるべきかということが見えてきた。子どもの内面の理解と子どもの遊びの理解、また遊びをうまく支える方法論などを今後の授業内容に加え、遊びをうまく支える保育者を養成していきたい。

## 付記

本論文は、その一部を、高橋真由美「遊びを支える保育者の養成—自由遊びの援助過程において学生が困難を感じる場面とは」日本保育学会第63回大会でポスター発表したものである。

## 引用文献

- 1) 文部科学省「幼稚園教育要領解説」  
フレーベル館 2008 p.256
- 2) 同上
- 3) 同上 p.27
- 4) 同上 p.29
- 5) 同上
- 6) 同上